

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第1号
平成4年10月20日発行

発行所
〒424 清水市旭町6-8
清水市観光協会内
TEL (0543) 54-2420

発行人 竹内 宏
題字
編集人 田口 英爾

時代が動き人が動く

— 清水次郎長の後半生 —

会長 竹内 宏

明治維新は政治体制を塗り替えたばかりではない。次郎長の人生も一変させた。彼にはすでに、徳川も薩長もない。統一国家というアイデンティフィケーションが、出来あがっていたのだ。本稿は、さる八月二十七日、東京吉池ホールで開かれた馬琴師匠の会で語ったものからまとめた。

私が清水次郎長をなぜ尊敬しているかといえば、後半生が素晴らしいからです。だいたい前半生がぐれて、後半生が真人間になるといのは、英雄偉人の辿る一つの定型だが、次郎長が後半生、真人間になるきっかけとなったのは、明治維新です。

慶応三年十月に大政奉還がありました。上院を藩主、下院を藩土が占めるというこの構想は、徳川政権がそのまま残るとい形だけのものでした。薩長連合軍はこれに反対し、鳥羽伏見で幕府軍を蹴散らした上で、有栖川宮を大総督として東海道を攻め上がります。

慶応四年三月、先鋒の浜松藩が駿府（静岡）にやって来ました。

浜松はもともと徳川の親藩です。しかし、江戸と京都を結ぶ情報が瀬繁に流れる東海道の中心点にいるわけですから、どちらが形勢がいいかという判断ができる。長岡とか、会津など東北の藩は情報ギャップのために幕府側について、後に悲惨な目に会うことになりました。抜け目のない情報が入る浜松藩は、いち早く官軍につき、静岡を占領します。

占領というのは、権力の交替ですから、警察権がとって代わります。幕府の出先機関だった駿府

町奉行に代わって、占領軍の浜松藩家老伏谷如水が、静岡の警察長官となり、同時に裁判官ということになります。

静岡という地名は、駿河の府で府中といいますが、府中は不忠に通じるといので駿府となりました。現代でもなく静岡という名前に変わりました。現代でいえば、百合ヶ丘とか、ひばりが丘といった、当時としては何となく重味のない名称がつけられました。

静岡の占領軍長官だった伏谷如水は、清水の警察権をまかせる市中警固役として、清水次郎長を抜擢しました。これは如水の慧眼によるものです。清水次郎長はバクチ打ちであります。現代でいえば、レジャー産業に占める賭博産業の経営者というようものです。

賭博産業は、現代でも非常に盛んで、パチンコの年間売上高は十六兆円、競輪・競馬の八兆円を加えると二十五兆円、GNPの6%になんなんとする大産業です。ちなみに、自動車産業が国内で十二兆、衣類産業が十七兆、社会保障費の総額が十五兆、軍事費は僅か四・五兆、いずれも賭博産業の二十五兆円に及びません。

江戸時代も、賭博はセックスと並んで重要産業で、これを押さえていたのが、侠客と呼ばれる人びとです。この賭博産業を押さえるには、なかなか難しいノウハウが要る。あまり収益率を高めると客が減り、下げ過ぎると競争激化に落ち入る。

これらの産業は、アンダーグラウンド・エコノミーですから、その中で有形無形のルールをきめながらうまく治めていかなければならない。つま

り、経営者は公正取引委員会の役割を同時に兼ねながら、適切なカルテル体制をつくる。次郎長は、東は伊豆から西は遠州あたりまでを配下に治め、地域のリーダーとして、勢力のバランスをとるという感覚においても、きわめて秀でていたと思われれます。

ところで、如水によって市中警固役に抜擢された時、次郎長は五十歳に手が届く年齢になっていましたが、これを機に人格が変わる。一挙に真面目人間に変わります。一挙に変わるといことは不思議に思われるかもしれないが、人間というのは案外、変わりやすい。とくに時代が動くときには変わりやすい。たとえば、この時代、静岡にはいろいろな人がいたが、その中の一人に濫沢栄一がいます。

濫沢栄一は、埼玉県深谷の出身。農民出身ですから、武士に対する反感が強く、徳川幕府が危うくなった時期に、一揆を起こして高崎城を攻めるといふ計画をたてる。その計画がばれて、京都に逃げる。京都には知人の一橋家人の平岡四郎がいて、見込まれて一橋家の家臣となり、徳川慶喜配下の重鎮におさまる。次いで慶応三年にパリで万博があり、幕府も出品するが、慶喜の弟の徳川昭武が責任者として派遣される。驚くことに、濫沢栄一はその随員となり、パリに留学する昭武の学問の相手役に選ばれる。帰国した時には、徳川幕府は消滅し、静岡藩七十万石に封ぜられた徳川家は静岡にいますが、濫沢栄一はここにやってきて、日本で初めての株式会社を静岡でつくりまします。その業績が認められ、明治政府に登用されて

大蔵省の主税局長になりますが、間もなく退官し、民間に下りて日本郵船とか東洋紡、帝国ホテルといった日本の大企業三百社をつくる大企業家になります。つまり、反幕活動家から幕臣、新政府官僚さらに民間経営者というふうに渡り歩くのであります。

次郎長が尊敬した人に山岡鉄舟がいる。彼も徳川慶喜の秘書役から、驚くことに明治天皇の秘書役に変わる。

また、次郎長の墓石を書いた榎本武揚は、最後まで官軍に刃向かった人である。明治二年、五稜郭にたてこもって戦ったさい、攻められていよいよだめかなあとなった時、官軍の将黒田清隆に「海軍全書」を渡す。この本は榎本武揚がオランダ留学のさい手に入れたもので、自分が死んでも、この本が焼かれてしまっても何もないということとで敵方に渡すわけです。黒田清隆は感激して一日戦争を止め、五つの酒樽を武揚に渡す。翌日から戦争が再開され、榎本武揚は遂に敗れて和睦する。この武揚は黒田の奔走で助命され、後に明治政府の農林大臣になります。

こういったことを考えてみますと、徳川三百年の間に、われわれの中に「ナショナリティ」というのか、一つの「アイデンティフィケーション」ができていた。つまり、国民としての自覚ができていたのです。どちらについても構わない。官軍と賊軍との対立は、キリスト教の中でのプロテスタントとカトリックの対立、あるいは、回教とプロテスタントの対立といった絶対的なものではないということです。したがって、清水次郎長

が、あっさり官軍についたといっても、これは裏切りといったものではないと思われる。幕府の直轄地である清水や静岡では、「官軍のお先棒をかつぐ」というのは何事か」という気風がありますが、決して脊信行為でないということを、次郎長のために弁護しておきたい。

次郎長の第一番目の功績に、咸臨丸事件があります。箱館に立てこもろうとして江戸を出た咸臨丸が台風に会い、清水に漂着する。明治元年九月、官軍の船がそれを追ってきて、残っていた幕府軍を斬ります。十数名斬って七名の死体を海に投棄しますが、次郎長はこれを手厚く葬ります。これは、現在でも壮士の墓として残されています。

当時、幕府軍を手厚く葬れば官軍に処断されると、誰しも考えます。しかし、次郎長にはすでに、「国家」としてのアイデンティフィケーションができていた。「われわれは一つの国の国民になっている」という自覚ができていたので、幕府軍の死体を手厚く葬った。つまり、日本国家としての法律のあるべき方向を、すでに次郎長は知っていたということでもあります。「賊軍も官軍も死ねば仏だ」と言って葬ったということですが、これはわかりやすく言っただけの話で、本来は日本国家としてのアイデンティフィケーションを、彼はみごとに自覚していたと思われれます。

この年九月、明治天皇は京都を出発し江戸に上る。慶応四年は明治元年となります。すでに徳川慶喜は静岡の宝台院で謹慎生活を送っていますが、徳川宗家を継ぎ、静岡藩七十万石の藩主となった徳川家達いんぎとが静岡にやってきます。相前後して、江

戸を追われた徳川の家臣たちが、船に乗って続々とやってきます。

一船に二千五百人も乗り、全体で一万七千人が清水港に上陸したということです。当時、清水町の人口は、世帯数でたかだか九百ほど、そこへ二万人近い人が、江戸からやって来る。一船二千五百人をはしけに乗せて上陸するだけでも大変な仕事です。なかには出産したての女性もいます。それを次郎長はみごとにさばきました。

江戸から静岡にきた徳川家臣たちの中には、たとえば、徳川慶喜が將軍だった時代の護衛隊である新番組の隊士たちがいました。山岡鉄舟が隊長だったこの隊士たちは、牧の原を開墾し、日本を代表する静岡茶の基を築きました。

静岡藩には、江戸にいた徳川幕府の中軸の連中がやってきていました。勝海舟、大久保一翁、杉浦梅潭などです。中村正直もその一人です。彼は「西国立志編」の訳者として有名です。英国のスマイルズ原作のこの書は、明治初期、人口三千万の時代に百万部売れたという大ヒット作品です。勤勉とか勤労、節約の思想を謳ったもので、アメリカでいえばフランクリン、日本では二宮尊徳とか石田梅岩の哲学のような内容です。これを中村正直は幕末に渡欧したとき、英国で手に入れ、明治になってから出版し、当時の人びとに大きな影響を与えました。さらに、津田真一郎など、そうそうたる人が静岡にいました。

清水にも徳川家臣による明德館という私塾ができました。旗本の新井幹がつくったもので、後に名門の清水小学校になりました。この明德館で次

郎長は英語の塾を開きます。静岡には英学の最精鋭が揃っており、この人たちが教えに来てくれたはずで。

清水の三保には、アメリカに渡る人がたいへん多かった。私も子どもの頃、アメリカ帰りの家に西洋式の「腰掛ける」便所があるというので、三保まで見に行ったことがあります。三保の人が多勢渡米したのは、この次郎長が開いた英語塾のせいかもしれません。

明治四年、廃藩置県によって明治政府のシステムができ、次郎長は市中警固役を解かれる。となりますと、彼は清水の港の開発に力を入れ、横浜との定期便を開いて清川丸や静岡丸を運航させます。

その時代のポイントは、流通を握ることであり、清水港の開発に奔走する一方で、次郎長は遠州相良の油田開発に協力するということがあります。

ちょうど安政の時代、アメリカではロックフェラーが出て、新しい石油時代を迎えます。石油が灯火用として使われる時代です。ロックフェラーが、石油をどのようにして支配したかというところ、パイプラインを敷設してこれを握った。つまり流通がポイントということになります。たとえば中国の現代でも、萬元戸と呼ばれる富豪階級は、馬車とかトラックを直す技能を持ち流通を握った人たちから出ています。次郎長が清水港を拡大し、横浜への定期便を開くのに力を入れたのは卓見だったと思います。

つづいて次郎長は富士の開墾事業を始めます。

明治七年から明治十七年まで、静岡の囚人を使って、富士の裾野の広大な土地を開墾し、これは現代でも富士市大淵に次郎長開墾として地名も残されています。

安政五年、日米通商条約が結ばれ、横浜や神戸が開港する。それとともに輸入品が激増し、わが国は貿易収支の赤字に悩まされるのであります。当時の日本の輸出品といえば、おくれた国の輸出品と同様、一次産品であり、金、銀、生糸、茶などです。港を開いたら、当然ながら輸出品を作ろうという意欲に拍車がかかる。牧の原で開墾された静岡の茶はアメリカに輸出され、奴隷の人びとに好まれて飲まれた。濃く出した茶に砂糖を入れて飲む、これが一番からだに休まるということでした。

穀類も日本の重要輸出品でありますから、富士山麓を開墾して一次産品を作り、清水港の定期航路を使ってアメリカに輸出しようという考えを次郎長がとつたのだと思うのです。

明治二十年代になりますと、次郎長も七十歳に手が届くようになります。清水港の波止場に「末広」という旅館兼料亭をつくり、ここで晩年を送りますが、小笠原長生や、広瀬武夫、富岡鉄斎といった武人や文人が多く出入りしました。広辞苑の新村出も、中学生時代に次郎長に会いにやってきました。新村の父親、関口隆吉は静岡県知事でしたが、当時開通した東海道線の事故でなくなつた人で、もともと徳川の家臣であり、山岡鉄舟らと共に次郎長と親交を結んでいました。

こうして当時の武人や文人が出入りする末広の

開業は、いわばサロンを開いたわけであり、今日
でいえば、経団連、あるいは商工会議所であった
かもしれません。

清水次郎長の魅力

理事 伊室 一 義

こういったぐあいでは、次郎長の後半生は、たい
へん素晴らしい時代であったと思うのであります。

私は伊賀の上野の生まれだから、清水の人ほど

次郎長さんのことは知らない。しかし、清水の次
郎長を私は好きなのである。ガキの頃から聞き慣
れた浪花節や講談が徐々に頭の中に染み込んだた
めか、次郎長三国志などの映画の影響なのか、そ
れははっきりとは分からないが、あの何ともいえ
ない格好の良さがたまらない。

清水の次郎長と言っても表面的な事しか知らな
い人は多いのだが、どういう訳か私の場合には自分
の勤めている会社の社長が清水次郎長さんの事を
教えてくれた。安田火災中興の祖、三好武夫社長
は損保業界では型破り的な存在で、この人に率い
られた安田火災は野武士軍団といつて恐れられた
が、とにかく安田火災はこの時期大きく発展した。
清水次郎長さんと三好社長との共通項は肝っ玉の
太さで、それは「精神満腹」と山岡鉄舟から折り
紙をつけられた次郎長の胆力に、三好という人は
心底惚れ込んでいたからである。「次郎長のよう
に、腹を据えて仕事に掛かれ！」とか「修羅場を
潜らにゃ、人間一人前じゃないよ」などとよく聞
かされたが、これは次郎長が子分の大政や小政に

日常言っていたことかも知れない。

ところで駆け出しの新聞記者が財界人にインタ
ビューするとき「あなたの尊敬する人物は？」と
いう質問をよく使う。「はい福沢諭吉です」「渋沢
栄一です」と返答が返ってくればしめたもの、予
め仕込んである福沢諭吉や渋沢栄一のネタを基に
対談を有利に進めていけるのである。こんな月並
みな質問に飽き飽きしていた三好社長は、「尊敬
する人物？それは清水の次郎長です」と答えてニ
ヤリとしていた。相手が調子に乗ってこないのも
不満な若造新聞記者が「へえー。あのヤクザの
次郎長ですか？」と軽蔑の眼差しで念押しをする
と、三好さんは「はい。私の尊敬するのは明治の
次郎長です」と言って涼しい顔、明治の次郎長を
知らない新聞記者は次の句が継げず、早々に退散
という塩梅だった。

「社長、明治の次郎長さんは一体どんな事をし
たんですか？」私達の質問に、どこで仕込んだの
か三好社長は「咸臨丸事件」や「富士の開墾」や
「英語塾」の事をよく知っていて、熱っぽく私達
に話してくれた。後日、私のクラスメイトで専門

家の田口英爾君にこの事を話したところ、「それ
は昭和40年頃の小金井新聞か、または戦前の週刊
誌で見られたのかも知れないね。このことを知っ
ている人は少ないんだけど」とのことだった。私
に次郎長のことを教えてくれた三好さんはもうこ
の世にはおられないが、この人の下で一生懸命に
やってきた色々の仕事の思い出と共に、私の次郎
長さんに対する憧憬は膨らむことはあっても、決
して萎んでいくことはない。だから、「次郎長翁を
知る会」の設立と聞けば何を差し置いても東京か
ら駆けつけたし、その帰りが新幹線の故障でクタク
タになったのに、百回忌記念「講談と映画の夕
べ」と聞くとじっとしておれなくなり又出かけて
行って家内に冷やかされた。「あなた、清水に恋
人でも居るんですか？…そんな力のないことを百
も承知の質問に「いやー、それが居るんだよ。そ
の人の名は……清水の次郎長」この答えに、家
内はかつての新聞記者さんのように目をシロクロ
させていた。

(安田ローン総合サービス(株)社長・元安田火災専務)



三保の松原

富士裾野に広がるロマン

—なぜ開墾地に富士が選ばれたか—

事務局長 服部 令一

次郎長が富士を開墾したことは周知のことだが、この開墾地を何故富士裾野に選んだかは謎とされ

ていた。たまたま、次郎長開墾より少し登った所（標高一、〇〇〇m）に神道天照教の本部があることを知り、ここに次郎長手植の桜が現存すると開いて現地調査を試みた。

話しのきっかけとなったのは、去る五月六日の「次郎長翁を知る会」が発足した直後、静岡市の徳田政信さん（中京大学名誉教授）から、次郎長に

関する資料をご所蔵とのことで早速お訪ねしたところ、氏の令弟が神道天照教を継承し、その本部が次郎長開墾からそれほど遠くないところに所在すると聞いたのである。

これを更に調べているうちに、国史大辞典、静岡県歴史人物事典、神道小辞典にも、その事実が記載されており、次郎長が、この神道天照教開設と次郎長開墾に関わった事実が発見されたのである。

これを証するものとして現地に、徳田寛豊（桜田門外で伊井直弼の首級を挙げた人）、西郷従道（西郷隆盛の弟）、高島嘉衛門、清水次郎長の手植の桜が本殿前に植えられている。

この神道天照教は、日本国に国教を築く大理想に



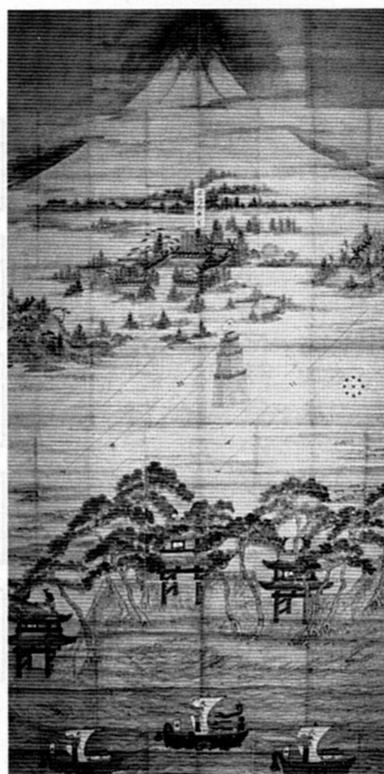
富士裾野(富士宮市)の天照教本殿

向っての大事業で、当時の高官であった西郷隆盛が京都に向う途中、吉原宿の「たいや旅館」に宿したとき、富士山の瑞気、天に沖する姿を見て、この地を日本の中枢地と定め、遷都も話し合った模様である。遷都の構想は、縦に五十間の道路を八本海まで通し、横に三十間道路を十二本碁板目

に交錯させて海側に三大楼門（蒲原に信門、田子浦に儀門、原に礼門）を設け、こゝから諸外国との交流をするという構造図で、絵巻物として残されている。

教祖、徳田寛豊は、日本を救い、日本を精神的に泰らけくに導くものは宗教であると信じ、神教、仏教、儒教、キリスト教を統一して老若男女の別なく、誰れでもが知り、誰れもが実行できる教えを広めるため、神道正照教の設立を試みたのである。この決意の下に侍の禄を総て返上して野に下り、その代償として富士宮の入会地二十町歩（六万坪）をもらって聖地を築いたのである。

当時の信者は十万人もいて、本部の周りには旅館三十六戸と豆腐問屋、風呂屋等立ち並んで栄えた模様であった。



三大楼門構想図

● 歿後百年 「次郎長翁を知る会」 発足

清水の生んだ偉才の人間像 伝えよう

次郎長翁が、清水港の波止場で自ら営んでいた末広旅館の一室で亡くなったのは、明治二十六年である。来年はいよいよ歿後百年を迎える。そこで、次郎長の有大人間像を探り、その残した功績を後の世代に語り継ぐと、「次郎長翁を知る会」が結成された。発起人には清水財界御三家の鈴木与平氏（鈴木）、佐々木哲雄氏（清水銀行）、後藤磯吉氏（はごろもフーズ）が参加し、会長に竹内宏氏

（長銀総研理事長）を迎えて、発足式が去る五月六日、清水市役所内で行なわれた。会場には予想を大幅に上回って百八十人が列席。熱気あふれる中で、井出孝氏の司会により、服部令一氏の経過報告、府川松太郎氏の趣意書説明、事業計画審議承認、発起人三氏のあいさつと議事が進み、竹内宏会長のあいさつで締めくくられた。会はいよいよ来年の歿後百年に向けて、スタートした。

設立総会で発起人のあいさつを述べる 右から鈴木与平氏、佐々木哲雄氏、後藤磯吉氏、下は会長 竹内宏氏。



編集室から

● 「次郎長翁を知る会」 会報第一号をお届けします。題字の「次郎長」は、編集部の懇請により竹内宏会長自らペンを取りました。

● 設立総会では会場に熱気がみなぎりました。なかでも明治生れの鈴木与平氏が、氏の母堂の語り草や末広の思い出などに熱弁をふるう。これは、歴史の証言として残しておきたいもの。

● 巻頭の「清水次郎長の後半生」は、馬琴師匠の独演会に助っ人として出演した竹内会長の語りを原稿化したものです。テープ録音はたまたま卒論に次郎長研究を選んだ花園大学生矢守祐介君（三島在住）がとってくれたのを、借受けました。

● 「次郎長の魅力」を書いて下さった伊室一義氏は東京在住。設立総会に列席されたばかりか、次郎長講談と映画の会にも、わざわざ東京から駆けつけてくれました。

● 天照教というと、おやつと思われるかもしれませんが。明治初頭に始まった神道諸派の一派です。その流れが富士裾野の広大な敷地に息づいており、次郎長開墾との関わりに壮大なロマンが広がります。服部令一事務局長がレポートして下さいました。

● 次郎長ツアアの第一号として、この十二月四日、五日に、いわき市へ天田愚庵の遺跡を訪ねることにになりました。竹内会長が同行し、初の交流で、いわき市の愚庵研究会も燃えています。